安齋漫筆

三

ワ3
6625
3

安斎漫筆巻之三

伊勢氏貞丈抄

桐壺

禄白大褂は女房のきぬ一領をくてかづけの禄に給ふなりといふ事
大小有り小褂と女房なくしては見せあへ気さぶらふまじきぬ物
其褂は衣の上に着るもの（貞丈云これハウチキノコト）
志ろき手ものひとへきぬふさあいのこうちき着用によみなかうち
きれしてきるものうへきをきて着ありはまだしたるもの
なり

細二藍之ふちえ（とも云）同しきにある色あひ色二色ニ染り文く
花こそちれハ衣衣とそ書ぞ付書見のくに衣衣の代りに着す

早稲田大學圖書館 昭26.11.5 受 藏書
門 73 6623 3

ゆへしらし（クレナイノコシ ハカマナリ） たゝく何の傍例 花に 能足口ニハ云

来ぬあしたに

たゝきく

志ろきけさにものなりぬる名れとさらりと志らけるべき哉

あてひもあさもからそてもひかまへの火(ほ)かけいとせひらく

画下りしみとぶぬぎて古衣斗とめける御へ白衣にてまし

まさしい遮莫陀羅尼 細 衣陀羅尼は紅の中にそ指也

と略して古衣斗ひきへの中甸編なるよし一乗禅閣乃

説なり然とも古衣にハあらんにもきぬとさゝめくことにハ

衣とうきうさらしとおもしがりと云る指哭と略する説も余りなり

夕のは

さらぬだにうらみのすゞこそみまし〳〵てさらぬめきてなきぬきあはせて

やよけしに花の中よりゆずりまく

花さかぬひらふし

又云女ハ馬よりおりて指出しと見るところましくてさらぬき

とハきてめきて出立てるんにや指出しを家なども有るし

なりや 細 付妻女のなり別勘の義女と云如何よい男なれ

きれ 明 所氏のめし連たる妻之 義なる女を雑之女も馬よ

おりける時を指出すと用ゆるなりとぞ夫なきともあるハ云

男妻と云なり

○扇のつまいとをこゝろしるし

（タカホ）しひらけり也さしてかりひきたけくうしほく人侍る

細 褶まく嘉なし引けるハ人を孫まさる之

ワカムラサキ

すゑりりやあふんとみえて白きぎぬ中とかきるすみなれる

きてはしり来る女ごあまた

ワカムラサキ山吹の次に

せうなうてつべきてどもとしの中にともきわてこ付ひいろけ

こまやかなるうちをみするなときえしてあまくれなゐ

してゐまへがいとうるはしきを

細 花ちの說なて貌之まひろとて用之 花 中りくときあてこれの

詞を上へつきたる詞くあそびなみどもと姉君のあきてみえます

んくまひ色を外祖母の服はまだ三ヶ月の中なればうひ色の

うへはきそなすへきく又火色服中にきるも手例なき

まあらはさまでもこの詞をまひ色を定めて片之作り

河 紅色之衣の上祖母の服とこそすゝる一説にこそ紺色 七

流へし火色之紅之祖母の服中なれども始て流りなる吉事

なればはなやかなるに今按紅色之紅染の紫也されども外

祖母服三ヶ月とみえて喜の衣も上下の衣法様なれば

例のごとくはすれてうちたるをときまでとあるべし

日ころのすゞしのまくこきやりは濃のまひ色のこき之但いま

祖母の服さして深かるべきにもあらずて或又色とは見えることも

多く云りなん紅貞丈按まひ色ハてもうすくもはかむべきいろ

まあふん

除ヘト本文ニ位ノコナシ

同クワキ
四位五位こきまぜにひきつゞいて

四位ハ黒ク五位ハ赤キ也

末ツムハナ

きあへ（かとおもへと）ものどもをさへいひたつるもものいひさがなきやうなれど昔

物語にも人の御さうぞくをこそまづいひためれ

ゆるし色のわりなううはじらみたるひとかさね

細 花色説云花之 延長十七年参議三善清行請禁深

紅花服参議之但深紅浅黄未及火色者不在制限ニ

今按ニ紅葉深色を禁ずるによりて淺をゆるし色といふ制禁を

及ス謂も是するなへ禁色を徒されて是非の衣を深き色を

ゆるし色とは説ち浮き 唯 紅の薄き色也

なごりなうくろきうちきかさねて

細 是ハ紫の色のくろき也 河 襲有大小男女とも

是するく成後ハ女の衣を是人是するなり 花 襲大小

うはぎにはふるきのかはぎぬいときよらにかうばしきをきたまへり

河 貂裘 貂和名布流木 西宮記四條附家舞人孫説

是黒貂皮衣之又捨遺中 ふるきのかはきぬを

是お入乃横門よりふみ伝へつかはし

まかればは山ぶとしもみなはいきぬはねどもかぜぞ人

細 むかしも是するをハ避近てとり 唯日花云江次第云昔著

客参人時之帽到王業時毛車是黒貂裘八重見ハ北タリ

件着宮終ス件書記一所抄建右宮記八重大熾ニ

近世武文ハ傾城ニ記ス

スエツムヨリ源氏ヘアツクリモノ

今井ゝ色の文あるまじくつやなしなめきたる あをしのうら

うへひとしこゑやうなるいろあひしあまりとしえする

人えうりさハきぬえ花 蒼色物語ニ云 法高肉親王 紅梅十二と 細 花なるま

奉りしると中納言局まありるかえぬてうつくしの今井ゝを

中ゝかくえくうがね物語ニ云よつつ下のうらき差花の今年ゝ

色のうらき今様紅梅の濃と云ことへど 桜あるそ似たり

きりて之あるまじきといへり

なとさうらう(ひとしく 細 青衣のきぬなとくすらえ) 見えそきぬの色ハあ の今様ゝいろ

当世のなとはかやうへへえまてうちすハ表裏ハ花田桜あハ白きけしへ

上ちまハあまえあしくし

閑

松薮叢木抄云 法成寺関白青衣ホ袴 紅梅織物

青衣累織物 指貫紫綿衣 等之実弘四年三月 又白

付成ち関白 冬磨紅曲水宴ニ人之着桃色青衣 柳

色指貫 山吹ハ出 祖永久三年十一月十四日 又前竟

行覚之且付成ち関白 紅梅僅段青衣 葛末指貫 紫 紅

衣 花上 まと之ハ今井ゝいろるきぬを云 付青衣も今様いろの

うらありて候へるに似たるとかや

細

さむき霜あさうらぬ狩りこのめ花の色あひ井ゝ之の人

あさまちとあつらえまてされたるにあけハ紅ありにより

ハ揺佳青なりうりさくらまで中もなし 紅のあかり

悦このあやの日井ゝ ひるこの紅衣をとこよけれともう人のたまえるあとて

一男えひとのとうとの、けて又中すつきゝそもいろ〳〵見えて
命婦ハなまりけり　細 蒲萄之紫色也淺こ行よあり
紫の兒ハともうしくしきさあひそくをあねだつりまゆしき
もありけるとて丸あらむと人のきよらのあてなるなよよきき
なりとて
細 花のる云 紅を紅氣といえることし如何のときあのゆあり下 呼 紫
上の衣のるえ 行 梅色ハおりてもうすきうらハこすいうこほと
あるハ初かの妻女の色すなわち
よろもたこ ウツセミ巻 てよよもたこみのとありよこういあり
うちときてとしおり文云の中衣えこうかれ色うとて人のをあり
ゆをひとし 一之

おひとゆれのあくあり
ゆみちの兒へ　継母の腹
はつくにゝ方ハ三月にてはとてつこありきハぬる世ありなゆまうく
おやもなくて思ひ出なひやうばまゝなき色よハあいで色なるの
むらさき山つきのとみつきうときけこうちきみでとえる人若葉
いゝくいまあしくあはれけく
花 紫の継母をと母君よハとてとなれなひてうし中なひとて
ましくと親もなくて思ひ出すかいはいえりさて三月の腹なれども
一つとんきのほどとあるハし侍り君紫の色よよひきの
こまやかなるときすひよりしええり継を入すよもこきくと
ふ中母つなりとハ云う実つも陰腹ハしゆ下と志つうくまたせき
ときとえしきぬく色なるようすると紫をのどきそてまかゆき

色とはいつもとよべきや何梅とえきくち字をの外梅さくら
などゝ色ありきぬと云べきや。作者のうちには文字を盛つけめ
ありし。貞丈抜く書きのぬいざきもきまへやきうちの字をえし
まぜあれいろはあしぞとは入れずおもむきまさて荒きを云なる
一地のかぎりを出でしは文をば地名のかぎりさげてをるし
一ツ文とはくくかく文をくゞりをぬし
ロヲヒハナれノやりノ茶
けなしぞく茎すつに名ありきけおひてぐりうめかせてもらう
きひてけるのかしろひきつくろひると
細玉の第に花うつが抄御に云う人世の中に名ありつけり
りるけ第あまきあるが中によしとおぼすところにさせむひて
たれに頭(これ)かそでうくいるて。あくんおりよのせらましてます

1

業昔名ある玉第には蔵花紙箋通之などゝ名あるものゝ
となりり
ちよのえん
かのちるよの扇をさくらの三重さそゝめそてこきちにかすあれ
月をうきて水にうつりぬんてくめあれとまゝしもへなのつうしくまて
おもしり
花云今梅桜のうす母し西白書藤芳之有智の光を賛
はけまの扇をひろげたりしとぞ何清が網そろ桃葉
すになまめかしきまの三重をそめの扇のをすに有るみはば
あまりあつくて云桧扇のあまたの月へ三重つくうすそり
そて色ごとの事そてちぞてまるとあるのむすびますて
色まさき紫きもけし風情に

さくらのうへのきぬ めづらし

けふのみすがたは遠之 花云 桜のうらのきぬは面白きうらの侍よ

模芳の書を作る之件本もけらなり

えびぞめのさしぬきにていとうつくしくひきて

細 直衣布衣とこそ出たる之郡家は上﨟も直衣の下襲之

下襲は使不常事とし今様袍に下襲と云ぬつとど

布袴とは上下用之事也 直衣布袴を係時係人用之之

帯は丸鞆之時附着蒔絵野太刀をし

うへ人とうへのきぬなるへし

細 殿上人とは袍ときるの義袍とは常の紫衣之をと係紀云

云係すしきびいろうとも也ぞふく

あきれたる おほきみすがた

花 袍はさし貫とし ちやうちんをたがいさしたり 大君の字

之九人のすがたみえしに見之 又直衣すかたとするなり 大君

すがたと云説あり 柳は此説を用

あふひ こきひの日くちめみどくすきこまかにて待らはつりのうはざる

もてあそびなるもち あをきかりしくさをめもいつれのくるま

めとんりくはきくみしとめてかり

細 あふひのくれなゐは紫深紫表とて下襲表袴といふ

は深く用之也 少候の紅梅染を紫と云なり 深紫と云ては

夜蘇芳を紅梅と用ゆる等とつくるへし

すのすきまみえつ地のろいと清らなる

花 いつきぬるまて数きらくはかる仕まてもきかくうさこもち帝女の
きさきの也
源氏にゝ給ていますらまて女御ハの御からぬ也 又あまり
御この世とそらむきかるおもきをまゐらひつ也人は出すかれハ
たゝあらからぬ也

孟 侍臣たち女の詞也御帝女宮とうすきぬきたる世とつかひてし
ぐしたちまてもとおは 又孟津抄つかい紫末ハ衣つかひとある人あり
といふと 〔言〕入道大臣の詞也とこし 師 衣つほとむといハみうけ
たる少納言のまへぬ君つまをおもてまつりなまむ也に 清少納言抄
草子にくるしきものつかひてうちくちきゝ人の色きゝたる
ときの人のうへみなさま 本ノマゝ 出されたる時之 侍従之

細 帝女のとりつくろふ時也するなり 花鳥余情ニ見えたり 河云 浮
侍従のくるまへならいのくるまと 是も華の也もあり
花 御器云女親王封面時総角若汗衫半臂下裳
表袴玉帯等文 斉宮文斉院 帝女総角青麹塵汗衫竿
臂下裳表袴白柳帯 今案童女晴ハ時ハ必袴上表袴を
きるうきき文宣ニ寝之世のなをハ表袴不見と云し
小きある由そしそかつまうも蕪のこらして見えさきたるなりハ
ふくろ陳あいましとおもひたを

孟 三ケ月源之 細 本妻の腹の色之色の着き之腰腹之 嫌同
中将の君ナひるの子成し 本ノマゝ 源氏の女君
きこえけすゝおもはれぬへくさきれたるひもちのうきし 御成し給

細
花色の従者のひとめ揃しいるに侍ておもしろかりきとあり 桃花

中将の御ぐしなほすこしふくらかに引つくろひてまほなるべし 師礼

のさまなどをかしげなる姿とすこし引つくろひて主殿の人ひとも

たゞ御さしのあはひなるべし

男も丈桜をつけたるもおかしき主殿の人ひともむすめめをかしげ

あしとどうてもすゞしげなるときは

今はこの年頃ひとの夏の御様をしのぶべきなめりかつ中なるひき

さしひてゆるされぬべてあらぬことらなす

細
花色に見えたるも淡服に紅の袴を用ゐしと見ゆ 長保三

年三月一日 定子皇后心喪に中堂関白のため大きの下

襲をつかふよしみえたる時なり 要略に二の酒をつかふ

紅のうちきあこめ人々はいろいろにて淡てのかさみさしいふのうら

まつもときざらむもおかし

細
ほかなるきぬはちいさほそなかの是其の服之人喪服なりけり

くはさ〳〵色 細 服者の用服之様にみえたり む 萱草色は

桂子をきて大略同じ色あひともかくろきさまとよせて候る

よろしえさりかきき経なるをもちてあるまじきまる

本松ニアリ
むとくの人[illegible]色のはしさを○えいはきこえさまつると

つまするをなにゆへなるかくそひよりもおまめしきなさるなり

細
将服女 花 子ぬ袍 ト 夏ハ穀 冬ハ平絹 色ハ男の袍のごとし

冠もせぬなりと海服者のさきまはりにて之 呼曰

呼
同ぶは冠をはめ何 若者ノ冠ハ布又ハ花之服者

ハシ又ノ茄子ニ用ル之　五口

クハンサウ 花よきあり藍にあらん 花ある之赤黄なる之今世ベニカバと云色の赤く浅き

あり是染る藍に模芳木クツサを入て染るといへるゆへ

藍と模芳まて染ればまことなる之白礬を合せても紫之

緑礬を合せば黒もあり 梔子の蘇芳敷へ又梔子を染て

て染ればクハンサウ色となる之

ダウサハ礬石之事 白黒緑黄の品有之 白礬ハメウ

バン之緑礬ろハタンハンロウハ之

さし衣

蒸のして

細布之 服去之 内 本義ハ葛の皮にて織る布也

中喪服ニ用布此為之　重ハ以日易月して十三日着用して

今服門之又裁庭て布と為る之 僧の着する墨衣も仏の法

服之為服る 仁明天皇承和七年 淳和崩

ふすゐの御衣しるしくまきまくすきをくたてへきゆすて

いしくみゆ

出家して
鈍色衣とあしてうす墨のきしみてゐるる之

うすいろあいろおひめの中をさまりしるてひきいてらるると

くつろひてあるらしかはると

花涙の中常の墨衣の色也

すま

さいめつ之人そのかたちしみとそしまつ位なき人あとそもるん

のけをとしきさいくらへつしきと云ひて
行平佐の束衣之誠を志づら能州出勝 故斑宿左云
人々ことなることを今係もせまと佐人ありけること
女房のこきはかまうつりてけさぬきほかゝりく
細 こきとハ紫之
しろきあやめし　本抄ニアリ
細 花色の説可然 紫花色表着紫裏又云々
本抄ニアリ
かたちのけそうしけるわかきさふらひ人ちするもいふしきま
細 平給の色今係与ちかきれハこきうすきさまかはりあるとハ
いつり 明 清のまゝ 呼 平給の一 行 襟束衣
あしの屋 スマノワギ

このくるゝ色のまゝえらびひきつくろひて
孟 言ハ兼良之くるゝ事をいふ申とおもひ侍る事之ある哉之
紅梅遠の間さもくるゝ色の紙をまぜてとあり
本抄 花の宴よこきあをいの紫のうすあゐの紙の色ニ合る
うとつくし
そら色のきぬのあやくハしきこ
細 あをくしきハまたみえぬの也 作 服色の万一つ色ニけさ
人傳あり
行 おくらのかことはある中よりきれはみぢとこきちらしとかると云
えのきぬこきうすきうすきのたび
細 上古ハ位の浅深によりて袍の色かはるなる之

盃　染てもあけも――　花月

六位の中よも――

細　あとりめを鞠鹿の祐といふ今極為とて第一の官人

是は時の日八第二の宮人まても是なるてゆる師　鞠鹿

山バトとく

色のあとゝて

行――細――　本物よあり

花を　又織物とを用なりなりあとをとり衣と同し

是あらせ　セキヤの次　本物と同し

うら山吹とを　以上一段こく

松風の色　エアハセノ次

いとあはれなるもみぢのおとけるへるを

まいなり　織男のまとゝのかはきてきるもの〳〵こなる直衣を

見るにあつてし

うすを　松風のつき

ヤマ　きのこのけるとはえみにあけて川にて

細　常の直衣之花　常の直衣のうらこきすはうなると

さくら色ていへり　かの桜人のお備ある色なるへし

つねにもくろき地とをゝかせつしまへ口てもちゐる本なし

細　今よも隔もあるし毎服にてまかせいて松まよ本なること

二藍ありうひとのゆきとしてすることてあるし

あさきのかさね　ウスクモノ次

こゝにおろして露ちらばしとさせすへおりしけるがすゞしく見え
つきもめのくへておかしきほどにさあくのあこめふれき
おひとけみきのうちとくさきあいろはこてあくあきまとろうらみ
すましろき庵すやましてもてくわさるいとけさやり
細 よるさこときえへきと夜かの男らあしへし 辟一解 直
いろすゞと一まきて見てびそにとねまてあこめ千りときろうまやあ
こあらそうかとしきあるまうりめく
ちいさきいはらいけてよるこびもしてあふぎみもおもしてありけ
みはおりけし
細 女の扇とおほえすてい面とかくさん為也されは扇子とも扨て
うちとけさま也 行 女房の武士ハ冬ともなぎふは用之檜扇なり

乙女
あさきにて殿上へかへりしを大宮とあらしとあさましきことにおぼ
ほしけるもことはりにていとおかしかりける
細 浅黄は六位の袍をいふ殿上へかへりゆひ又着を元服にて
童殿上し元服したる人ならば六位 孟 師 六位の殿上なり
花 一世の源氏の子にて蔭位にても従五位下ならでは叙されぬ袍をきて
殿上すべきを冠者の名あさきと見られて二のくらゐ四位の
蔭でよりもやや叙爵せさりければ六位之近衛を継殿
世位に浅黄にてあらばあさぎにて殿上するといふこし 一説に六位

のちの花とあさぎといへる縹の色を藍にて判せるとて
侍るは浅黄の色なるべしひとなをことなりて二帝の上あるのこと
物よ六位を召せらるゝ夕霧の前にあさみどりやいひそ侍る
（きよあれば六位にて昇をゆるさずや　師 康は聞えて
例をこゝそてもさまざまおほん位をえらんて
ゆあきひさいりつくろひあるべしとのこうらきみてかりとぞ
こゝろもとりうけずおなじすくひとをおもふればきこゆるなんて
人之をかゝり　内府の本役中務之
侍るし
あさぎの人ゆゆしかりけれ　なおなりけり
細 あさぎの日 青衣と云事之 金葉集 但馬 仁平之年

十一月十七日癸丑晴 今夕参内 師長朱紫直衣之
宜旨來事ニテ参入似セニ而同行参内ニ業之五郎
のはしにも青衣を纔ニ人之ありけり
人しらぬあとをよはくらまぬときすみ
細 麹塵之事 時服ニ諸臣着 麹塵袍一日青色之 花 青色
の袍乃下襲は桜がさね或ハ柳等を着する之事 桜の下
襲のみ西とも通之青き桜之　古物ニアリ
内にハあをきものゝかそてなかりけり
事 西宮記曰 内宴之日 長下皆麹塵 主上ハ腋赤色而
着一上以腋 袍之袍 五文例之 有新例 中拘負
行公 並小野宮大臣度ニ赤色 之寿 要之ハあるらしさて

澤るゝころとゝろきけん奉るみゆきといふ人のきぬのうへ
めしありておほきおとゝ来まうおほしあつるときえまほ
細
はるのくれのほと里一の御んなをえたとまうしたまと
すらん御前めの文たまはりけり
おほきおほんきみ御ふいのこきあこめたて人のとうとのつきまてあ
みらくみつ手のくれさへいとゝふかきてらうらしめたうてし
と御めて来る
呼一拝
いらへて女人あこめを持まかうすまゐるたうめし
さるくたときめつうこえらきえは大とさたすめに
紫式部
西藤苛書をとて手あくちら打まの前もよろうくし
さらいの御しきなとえおほかりしはてさうらう

花
菜花御前よまいりしくのきさけをまらふはつりけせかいさうき
といまの世をはこめさせて都へまつりせのあさえたのをと
きせるて人の詩をときゝてこれも上東門院のかたく
むかうして女次
きえかうの候
みゆひとろらい拾うまきみをきていくふとろみうり
細
彼をも待さて新く染さるのく
花
本物にあり
さつきのひとへめくのきこめる一のうめすきみけにとあさうし
めてたくえ由
紫式部のゆく
細
一本のしひとへめくめしおもいつきぬとくとてのことゝ
そのゑ卯月の頃ふえすきのく
河本物ニアリ
ことくいのいとゝ
本物ニアリ
しいとすくれさうとこみゆかり

〻弄　いまやう色とハくれなゐのうすきなりと云〻　此説拠之
桜のほそなかにつやゝかなるかいねりとりそへてハ姫君の御れう
うすき也　是も同し
細　桜色にて白きつやゝかなるかいねりを白きと云之　花　本抄ニアリ
あさはなたの――こきかいねりくしてなつの御方に　花ちる里也
細　大海なる紋也
くもりなくあかきに　山ぶきの花のほそなかハ彼西の対に
奉れ給ふと　玉かつらへ
細　くもりなくあかきハうちき之　花　山吹と本抄ニアリ
彼末つむものゝゆへよしあるからくさを　あるらしきと
みたれおれるも　いとなまめきたれば人しれすほゝゑまれ給ふ

花
柳ハ表白く裏あをしと　人々の知るところ云〻
梅の折枝――つやゝかなるかさねてあかしの御かたに
細　小袿を紫之　何歟を読く　花　思ひやりけたかき人　本抄ニアリ
空せミの尼君にあをにびのおりもの――色ある
細　あをにひ色は薄く上ハ白く尼も用ゆ　柄そゑ給へる
花説一説
山吹のうちき――うつほにてうちかけ給へり　末つムヨリ使へ禄也
細　使の禄也　花　袖口の――　本抄ニアリ
きてゆ　玉かつらの吹
思ふにも思ひけり――　本抄ニアリ
何捨往をよむ　花　本抄ニアリ

あをきのまへてめつらしきかさねの色あひ何のくさにかあらむ
かさしの花はさくらにて人のきぬあかれと下にしきやおりしらん
わきいのちのかつらなり
弄帖 ある中子とさることの六位の中にあり麹塵の袍なり あねみアリ
是はかさし白下襲之 花 李部 玉冠 蹈哥人紫末無
櫻冠 麹塵闕腋袍 白下襲 着 浅沓 持白杖 西宮記
束帯之青色麹塵袍白下襲半臂白石帯 下略 今按
此青色と云は舞人以下とくにきる麹塵袍也 此二人にて
夜袍を着するよしみえたり かさしのことく
かさしのさくらはさるはずのえうらかしきにこあきく
たちてもとくしくなるかしさを木くなるやうのおりしらる

一きひすりしもゆるさぬものと
行 ある中子 細 花別勅あり狩衣かすしき老のききくするなり
狩衣帽子みてなりたし 花 和泉抄云 召御中子 遣仰可奉
ある中子二口云々 今案ある中子の冠をも中子とあるにして黒き
紗にてそくとくるも不もこれとくしかも六位の舞人の
うちをとを着す常よりくるぬる姿なるよりて世をなれさ
といいへり 狩別にもあるてるあり 以綵表面云々
かさしの綵もまたはひも 已下の文 あるのこるとて
に 蹈哥の人以綵作花 着冠額之 号ある中子云々 孟
綵をしつらけてもつく 花 和名抄云 ある中子 六位以下
綵 表面云々

あてよ　ちる日の次

けさの山あそびましていと面白しかゝる中夏のころきゝ侍る乃
ちらめかりける中でさまでおかしてやすらに入りくるひの中にもなは
え中にも人もおかりけり

花
法師あやまりて別る事ともなると寿かりかしが

夢の衣　着よきかへまかし之　細　未帯くはと花やま被する
之生衣は宿衣之未帯八日よりそひあり
ろくとりつぎていろくなるふとりよはさくらのほてあつてふれ　蝶
まきのうさ日ありる日てもとりあへるゆるあり

いまし　多蝶の舞のさふらし

舞の師
拙のしもかは色ろき一うさ日そさしあてつましくまかる中将の夫

よはちのほそなかをつて女のそうりてくらつけますへ

細
白き一うさ日结ありに　こうさし腰に巻結のよ之　花　西結
とこうさしとえて腰にさしてさむをのあれはあり　妻　女の装
朱とは裳うし衣なるへし　裳とききけをそするを唐衣と
いふ今の世にも髪上の内侍みるを見へし
あてしこのほそあ　李杉ニアリ　ー　やうちきにあくひけらうかいまめきて

花
あてしこー　李杉ニアリ　いふやうの花とえにをおりて白襲なき
あいあいびけらうかハ色あひのるなかりー

ほたる　こてふの次

つやと官もこぼうハうつあるけでようちさきゆる也し

師
東衣・友をまくらつくしきかそよまきらるる　ようり

いまあきらすてこのけ几丁ー

花ありつアリ　手　上ハかくてきらくのすゑと清くそも紫そて

こく渡らん今の世そし車の下にて花みてハぬけ

きしふさめのあこめうさあひのうすめてうさこきうろうもう

くくて西のさいのあめ

花 本ね　に　画き　裏白きく

あふちのすりこのしうきぬりふのよそひたちあり

花　手　雲ときり附色そちとうきぬてえ

花ちる里

こゑこゑのいこさびしくきさめまるきでしこきさめのきさく

花　見ヘ文ニ袈のこきく　濃うちきをささめさろ衣なりなてしこ　に　萬荻丈

花　うてしこにあやてすゞしうらまし花よりさこゑ色なり

若葉の色とは紫よりことよる色なれく蔦まへきなり

野分　ころ是し　床立の沢いふハ（おろさせまひてひしのこてらよ家りハせをくれり

さあん成てこのうらきあこしよとも成くしのきさらなし中の　幸ね ニアリ

とれなあひさるまて足人くらう一道てころこゑくさむ

さよりいていろくのさくもとめてさゆまい

見えて　さあんなてこハ小袖　袖の色なり　ちかねも　紫色の

るよしあり

花陸逢　あのこちみてすわひころちかまへよあまさしてあそび川　スリテケルイハ

めくりのよめさしけてまさくるつき人とりしあくいしきよふみ

くちぐのうすめのいき中ら色のかみくうちさるみてひきちらしきく

率おほうし 諸おほうし
ゆゑとしけれハとみところつゆしる花してちるすゞ深のて
たちへらいとあまたほしきをしらり
花 花文綾と有花文の綾なり 謝恵運詩云 客従遠
方来遺我緑文綾或説緑文綾なり必んよりやすくえら
てとし 麦の青衣之緑文絲なし云かてとしてみちつゝ出ける
細 月草の事之鴨頭草の之 花 はじめの花とハ鴨頭竹の花
をいふ麦の青衣 花田ハ深すなへ之ちらず深けるといふみなもと
深ける之
うすいろのゆゑするのまさしけれハつきるまでこのびらけ
るゆゑていとほそくちいさきゆきといらへるなんなし

ほうし 貞丈云さびうすいろこきいろなどあまた染めこき
うすはとあるなり
ふゆきの色に
あさぎの上のきぬえびでさめしさらぬを廃ふ人ハ位高位
まで也けり
細 麹塵之一名ハあをいろなる之今の六位蔵人袍
萬の色なり袍色なりえをハあるハ毎年の此にあらず
色御しるよなりハ一月の時し 又 袴長色 麹塵袍
野行幸時ハしき鶏冠色赤白橡地摺衣太刀鶏冠
色青白ノ地摺衣之由 競摺袍人えらり 花 李部王記
延長六年大原野ノ行幸 天皇麹塵御赤色袍ノ親王只

今殿上侍臣六位以上着麹塵袍今按主上ハ無文御
袍を着し給ふ其外親王公卿以下皆青色の闕腋袍を
着す下かさねをもえひそめなり着御をつかはぬ人の出立となり
みこ達上達部なとなる所つらひ出へるをめつらしきなりの
やうなるひともまうけたる
に 摺衣のこと 細 麹塵つくる今は皆衣裳を野にて染なり両
袖に見えたり 花 李部王記麹塵袍親王公卿着把摺布
衣の袴或用紫末濃色ノ綺袴小襖子頭袋今按
王卿の麹塵の袍を着すなり衣の摺紋あるを見る袴
なりし或は紫末濃地のきぬ摺めとをもきるよしなり見るを
みへし紫の冠ときこへし仁和の芹川行幸の行幸の

中納言大麹塵の上衣に摺の袴よぬひすも王公の麹
塵のことなし
是の麹塵もいまは世にめならぬすり衣といふたまきつ
気色となり
細 是は諸衛之六府をいふ 皆すりきぬの衣なるうちて
あを色あをと見ゆなり 明 この色のさまひるあり 花 読泉とは
六衛府のすけ以下といふへし に 今日主麹塵司正一人掌調
染麹塵大子衣物の染のすり衣をあつめられ
しらるれ
見ひ津の内摺ぬきさくらの下かさねいとをかしきひきて
花 車衣布襖之標の下かさねを西向くうちあそひ

さくらのうしのきぬはなやかに今めかしいろのかさねにきこえてし
とけなきおほきみすかたいとをかしけなるのみし
花 光も南殿にて見え給ふ今めく色のかさねもつねよりきなかなり
下襲とはえ見え侍らぬ大君すかたはおほき衣かしまいりぬ
中をより奥きはもこうきぬはなやかにけふしあけのくわそに
なくて
ほかなし　玉かつらのときの詞 秋ぬ中宮よりのふみに
あそびのほそなかに一かさねおちくりとかやなまめかしやむかしの人
のめでたうしけるあるまのうへのむらさきの色ちきなかなり
あはれいちのからうちきとよき衣をこえ入まてつくりてらいし
うてなともいへり

光ち玉かつらの巻の詞にまつむし花よりのまゐらせ
手 あそびの服なるをも用る在例なり色を山服へ
おちくり
花 こきぬのくろきに入なほちよ添ふるをいふへし
ちふきりえたる
細 ちらかくれなる花は 笛のちくさきかはらるぬうらと
ちいさきもちるなかもあり 師 笛の家のちふくさるえあるを
ゆゑくさるあやまの文なり
貞丈おほせにかへりの色をゑかくりのかさの使の高ま まつむし
より絵かかし源のゑといふやまのきのうちきの袖くち
いろしまけるをとふかそうらくけさらとえゆう末

つひに花も古代の風をうしなひ今は当世の風になりぬる
事にや又祭りかしなる拙なきも古風にて見るべしかりしを
かくびとの事もとは日ひらき見えてかれぬさへこれける也さらにまり
くわしく云も句に定めのかたち中なるまじびて色々くさくるを
云なるべし詩歌連歌の格にいひあやまりし文章もさきまう
横さまにもあまねき定まるまであれの詞にしては白く
しかるにてみかなるべししらしくさくしとも事もありぬ
なるべし
後ろのま　本朝なし　行筆の次　巻廿九
うせきうびるの中にてまへうしきほどに中つきて
細　三条大臣女中をまゐるまかの其夜人々の見え三月廿日と

後のうら書にみえたる正月なるべし今出川のまくる祖母の
腹と見えたり　孟　三条実香公の女と見えたり出て
実和中納言の室となりき今出川ゆかりの寺やさかの駿地をすすむ
ましえいまだ其時はしらねども中すさいてなくならし
夕方も孫すれは正腹なりし人の後室よりて其の室
殿とも夕方を一段申さとりさまらて申とほぞよりてまきこ
見むともたくしいふ門孫ある初めより大宰少弐実に
つくしまてこそそして凡三条殿の其身息に参すきこえ花腹老の
巻漏すらいとさうとのちくくしあ香漏を正腹のまきこ
まきくもら　着くつきは
よ紀の人の中にて中るまゐの下りき又あとまびの其きの其のまなしよき

きぬひてひきつくろひかへるいと艶かし

抄 袍なりに 青純ぬ 花田也之 画 大将の装束之

青純花はぬき柳下襲ききぬ裾之 畔 間柳の下襲

とかくはさぬともして下かさねの色に付ぬよそふぬ

さや一首 下襲の色に付夢よりて桜梅よ十一月より

花用ならし表白も柳とかきて夏しも卯の花と云同

抄なりし

○梅かえの書とくいふさま○―― 抄のとし

夜のうら戸 梅かえの次

あそしこそあかりこてかろびさえぬ也――

細 三位中将なるる程にそしあれ今まて二あんの色をきく

似合さりさし之 花―― 抄ニアリ

寧ぬゑのをすてて 花――

丁子染類家原浪抄に丁子染の温するかくのくろきる之

丁子をききみていふもわするし色なる ぬきすや

さるききあやのあつしまし花なる本にいてのあやしありてつし

めきしるそいふききこえし 此 花なるにいてのあやしを師説

の中まハ白きあやとなしてこそのあや イ本 とあるなかの丁子

染してまさ白きあやといて不審こし 悪梅 一説に丁子染ハ

うきのめるこ白き綾ハきあるしとし

涼ところくの色―― 注花本抄ニアリ

庭の雪ををちかゆきうらくへの中人てとなきとくのみちあして

そてあときこあときをつむしすくらしえひ染なとつねの
こと例のえうしのさのかりの氣色とえせてよしきまめ
ともとほのよ拜つくゆきのけふ〳〵りいろはとりの今をいと
おりけなり。すゑりたひそあ
わなし　夜のよいの次
さいの人〳〵も濃きゐり白きかさねくしのひて人の秋なき
てらる言とつていときそみてます〳〵ま面いとおかし
櫻萌のよの外なり表白き生文なり〳〵し　ゆ　裏赤為
同上下共白紫史九夜に欲白紫末綾筋衣　九朱た色
桐壺に女房各共白裳唐衣　汽系 降祉
大ちゆ衣十よ皇子誕生のけの事をいふ

櫻のかさねの中なるはさくらぬきのすゝしかきりはすゝしかさね
氣色なりむきあけまし
細　香直衣之呼　表白裏スハウ　花さくらぬきの狩衣なり
嵯峨の院うゐはりてとしくさを鞠とけりて後くの院を
とうくはけふをさやの御はあるへからひとりあへとゝいふ
さくらぬき姿なるへし　後よのさくらぬきともとえならへし　柏
木すりなれ
こうさいやあるこきうすきうすきゝあまた又かりしよ
けぢめくるなかまさうしのつまなかよりえて櫻のかりとめ
ほそなかなるへし
花　まあの御くしは双紙のくしの後なるへし

らうそ下　マイなしの次

山あいよし　わかニアリ

めいあよし―すくうつきゑえひそめし

一新よすべうきゑめるの字あり　細　けの文字有無両本アリ

よ下きゑのみとお花なくすゝうのかきゑをるるの

下まえひそめる扇よ人の下まうきうばのく字ありきと

一さ刊ひきほころたし　細　かきわうをぬきたるあるへし

咩一段　ひきほころそ手ハきぬるもとえり　異本　―良人おし

ひきわころくすい花のつぼみをひらくるとほころふるを

ん旧し

ワふこへのうち。

女郎のゆうち――・

あうしのゆ方

細　茶碗の青蔵なしめもなう花し師まうえそい

臣人なうしはくのきゑのときまうこし

えめなんさくも―あるいは新めうきええひそめのあこゑ

なしもゝこみむし―

あをる　細　よろくあときこ　花―

あまゆうなるゆうな田しうるよきこうなゆてしも神いさくそき

しあてひきつくろいて集り絡　ほるし

きてのほをるまけくうきたたましこほ逆くし

笑のうへはえひそめしやあなんもこきくうちきうそすくうの

ほとゝきすゆくへしのきこゆるつけにほとゝきし
柳のいとよりもし　本柳ニアリ
けふ見ればみかりのこはなかくれむかしぬ人にこゝろは
あしひきの山の日のあかきさくらちるなこそひとめ
のかゝみときよくしらるるあをによすからしけくく人
ニ二十人のかたえうつしのときしり
丹和名抄ニ和名邇（迹カ）とあり二下云ハ丹のことそあかきいと
青丹よりあをにといひてあをくむしたるあをによし緑青と
いへるの緑青をはいふてすしといふなり緑青の色はあかき
うはあをきれたるもて丹にすつなり上のてくにそ丹に似てある
ゆゑあをき丹といふてあを丹としるしゝ色をなかさるてあれ

丹もとのとぬりいろゝ地緑青にぬりたるもらそのなるを
青丹といふ之紫本の色にて緑青の色あるを青丹と云て
ひ書と引る万葉の第三ヒメモス ニ三 シレトモアカス青丹ヨシ
ナラノミヤコノヤマトナデシコ式第のあをによしならはな
と秘閣なりやまとなでしこのあをきさいなかゝるハ此にて
しく木　ならね下次
きさくらまゝひとゝゆうてもさきちるいまやうたる色なるに
きすひて　せうまの花染之
なかこそし
こつゆにはじめのきこゆのいらへきゝしほのえさ
柿本紀は御ゑり
○いはまほしけにしてまゐるか本下の衣のへしくゝ

わくさありいろす紅腋中のさなし
いまとは細き着るなりあをのすずしきなり
よこふえ　十六ノ次
着るものかさねのうへにきるなりおきてとひ出なひて小袖と
ひきそへいまも絹さるはいとしろくまろきうすものゝ衣
のかい練の小袖のすそにおろくきをけなけりひきそへにてけ身
いとあはくてうしろのかぎりにきるものくろさきすれいのなり
なまめといふらくさけなりく
紅のそことめかきて庭なるところて人世にふてまねきまんいは能く
てきさりきふるあいめなをしのきるときていうしうさゝら
らしき

丁
二藍　青衣のかきうときはあさゆきいろとし衣裳とは
ぬき捨て青衣だのると並てとゝに帯もとけるみき姿に
花　あさみのき帯のゑるとみとそこころこ蓮二筆ころの小袖を
なり　呼　あさねきけめなそていさしぬきもくみとをむ持して
ちいさきくびのみかくれと小袖の中ゑみきすることかきるとは
きもかりれもなとしをとなすれぬなり
紅むし　ところえの次
なしまそてうちかひなるゆりそてひらもなれとてささえなか
まりくて
丑　青衣布袴みてるうちの下襲といひてこまくはなをし
しあなとうけてくには　青衣布袴のゑ西文於上藤者

下若下襲随便不常事之

夕きり すゞしの袴

いろこまやかなるうちきにけうら（はこ）さすまて（凶けうち之）かけ給へり

夕日のかけもなくすゞしきほとに

昨 萱の直衣なれハすゝしきを枯ゝ萱の直衣也とみゆ

直衣と見る之

きぬともいろこそてつるはみのすきあひたるをまとこうちききたり

花 橡ハ秘名トツクリ黒色なり又ハ黒色と染るなり又四位

以上の袍ともそれて染るなりつくろひの衣とも云 図にあり

古橡とも橡とみえたり

人にもあまやかなる色の中まにきこえこきぬあとまひ

なれきたるはせうすいろのもあをくちなるとさうくま

きらしてけさいろをきる

さいわひ萱の橡きぬ（ひとへ）は染なり大略そこきいろとそ云ハ

業なりとさはまゝしくて服中なれと吉服の中なりて

内陰服する人のきる也

きほわし 御法の次

身つらのけうはしもいろをよの事なれとさしけるやつ

してむの人をよまる

細 手絡のなとてと談へり志の浅よりて心喪の服なる

あり 昨 或人云妻服を一期の中に一度着之し三条院葵

上の時ころは服のなるあり何と云てて着ふりし素之着之

勝の浅深は志の厚薄によるへし 勝は今日本妻 嫡子生妻之
晦三十日勝一年子不生當妾晦廿日勝 三月とし
第の上は若き妾のあらて三月の勝は次の年のくるまて
のさかり衣もいつはりのつきなきともとゝえくる世の花衣
いふ勝なりても前宮若光の大臣なりは是之時も頃
二月にてありく歌合の名勝なりてまさるをかしてある世
ら之 異花花 第三は八月まて過たり源氏の君本妻
の勝ともなるなしのよしも三月まて久しまるまゝ次年の
春まても老人の花衣とおもへり陰は氣色とてさきまて信て
よつての桜はなれとも後とおもひて平後とおもへりし
行のきくところ――

花 紅梅―― 中将のきみおもひまさるとき之 主君の勝として一朔
のなきまゝ之
竹川の中て 前桜の次
桜のほそなる山吹なとのときあひたる色あひのなつかしき
ほとなきあいきやうすそまてあいきやうのこほれおつるやうに
こそ見ゆる
うすき桜よりくしいろそて柳のいとのやうにたをやかなる 髪の次
もしひめ 竹川の次
さうのうへさしぬきぬいすててさうひきる一り
花 平緒の中衣之昔は公卿も中衣に平緒を用ひ給ふし
孟 カトリハ平緒を用也 殿上人ゆるし又公卿は先是まれなし

の文字の時ゟし又服ゟ木らく

椎かもと　はし姫の次

こきむらさき色のひとへにいさうのちゝきれりてさ申しさる

中くさあらうそ花山あり（とかく）中をきるしのたへ分今に

うめりおひたるけにさらしてすゝひきくしてめしてまへり

菊かさね黄くちなし色之服ゟ之し　細おひもなみけちみけ

常のさま之　呼　みけ常のさま之物ましてみるゟ女のくるま之

又云常といはしきぬのひきこりを常ゟの（まや文字ひきさ

しらいうしきぬよちひきさとのこもこりこりとてあるく

貝太云うし良ゟらひさる裏なるへし

くろきあいせ一さきの門しゆるかるときあるしゆ之　盃　紙色のあい之

あけまき　しゐかもとの次

志ほん色のはてみつうえさきのめたる歯

花　紫苑色表は萩花裏　萌黄三重さきの衣こおりく

あらて中（入よとき之）　細　三重さきの衣こおりてあらて中信

ゆう綾なり

風のいとあらきおりさきれくおきあらりしも（分申半）きうん

やおもとたろ申りなる色あひよ申りはをてさまよるあまおりし

さらん申しよ　ほるし

かしらのこおりとけぬるとこあるといとぬらしさへつかるめ

まふ

細

花色の衣をす紙　盃門　花紅のきぬとおくるきぬの氷紙

中にも君る之下の詞にてぬかれしとてあるは底の事と云り
異説 とけぬるとけぬと云本ありぬさむ一説只ぬかれもはら
氷のとけてぬれたる人あるへしされてぬかれしつといへり
中の君 さわらひの歌
別上人もいとおわらかみ二人をめてうちつけてかゝらて
み佐七人をこへさゝめうしきぬのうてとうなけらあるをと
ありてなほしけとは地の文ますさることときにしとてし
ことらし
花 女の装束の色々の襲夜衣等あり 細長 女房の裙之
なとを別るそとて思あり三重かさねのうち衣を中倍あると
云さや勝は小勝川勝或白或地摺或地摺浅木有花文
嘩 うへ衣の色もいろいろあり又織物之事しとある平絹六の
たくけちめあるといへり
底の本
君たちおしなへてかさねいろとりかへてしみわたりまさりて
うちとられえをさゝ由
君は中君之 師 家のうすきにかてしこ表紙裏書あり
真丈物たて事女の子あふれ不はぬえあり
いまよりまさりあつらへてのをちかあるりるとひきむすひくいて
むすひかもちきうこてなる恋ひと心さくひとすちきうち
ゝ事は女ち 薫中納言より匂兵部卿のまの宮中ノ君へ送之
中の君

まへしきほとのけしきなとかうきすゐてひとゝときき
みえて
こきうちきなとにて ありしきわたりてあるけはなく色のこ
うちきなり
花 本は一 ― 作 若苗是又ほかあまた色くさし 以下本
ありけるか若狭冠本
もひ色といへるもいろきよしとはまたある之
五 弁尼の紫米之
あつまや 中の本の次
きちんいろのたるなかなるまくところなへしのとりあわせるくものふ
なきなりこうり池くちさしいでたる ほとなし ウキ子子ノナリ

あるきかとて一たきよ○ちらりまて おとすから
三 中君の紫と出しあまりしきあとも莚まいぬ之 アラヒ アモホス之
白きあやのあつさけなるいきかり色あうちめなると
きよしみるときそてくしのもうせんさいころとておもう
常陸守かむこかねのさすとうちめ 五 板ものりと川て継と
押てそてつけぬのこよする之 袷なとも同しき之のうあひよ
きこ○貞丈をうつしてそのりとしろとこ之いきかり色之
うすお桜の色こき之
川まうよぬまてはそのうちなおなうよ 紀之なとしのものおと
あくしくうつりたると
五 莫の表衣のむのくろ之服の色はなまひきらし

良基云花とハ久しく花之 ツキクサノ 花なるウツリヤスこ

うき舟　あつまやの次

ゆふそられうちすさひてけつらせてこきしめよゐ紙乃

とりのみをあつひおくしきこへてみえ侍り

こきゐ 細 紫のきぬなり

侍従もあやしきさひしきことをあさましきことはとも

よそにさひしきと云すしえりもところみひて君なきませなて侍つ

まいらせ給

細 侍従かさひしときにへきると浮舟にきませのよろ侍

あのさかえけるおひうちかけなとして給ふむ

浮舟入水のさ所に侍るむなるへし 細 うけ侍るへし

かけろふ　うき舟の次

とはさとひ給ふ人なきにうらみて云々

さりぬともうすいろなるとをきせて侍る

細 うきふねのことをきあまりぬるはつへん人々もなけきとは

吉勝のましてあるへ 師 つかへ人人あつけぬるに常とき給ふ

かたもなくぬるらうそれとも蔵人弟之 呼 侍従かえに思て

まうしくひに 女房 してかをりけるうき ——

もへきひめのおひさらのわしまうして代ものいとく

細 斑犀之花なる人えしり 孔斑犀 帯 四位六位の人

本子用之也 服者なと 烏犀帯 深闇にハ斑犀をさす

ありけ帯ハ名物あるへしき 云 浮舟の死後にまいりすること

人となる三人とりつゝいゝみてうゝきぬもうさをもき
すゝるうちとけゝるはゆあしたえぬいぬてゆきうを袖の
ゆそき三人ゝ人々のよ水をもちかくあふぎをすこし
えつゝ三人
こきなるすゝしき衣くうすき裳きゝる人の扇うちつかひ
ゝる
ひと〳〵もえりまもすしなりしと見えつゝ内すゝこなれ　え女人
もきつけたるあらくし
盂蓮の玉衣姿といへりひと〳〵も猶も生なれはさやめなる
よりてきつけたるいぬやしありて
丁子よふく染たるうすものひと〳〵とこまやかなりあをし

きぬ〳〵いとこみまゐりけるなり
河 無量丈六大仏 六月の比丁子染の帷ときぬこき
大の君をしうちむいて裳ひきかけたるはいとなく
細 こきあこめ黒し文あやさしもはてあふひはひしあをはな
抄 女のきぬかよ裳をきぬは男の裳をなしちと同し礼
うちきよ裳ときたる袖なる男の袖よ手にちかくなるま
えりの出立之
さそれはぬきすへしとせちうちとけてあるなりける
男　けりふの次
男きひと〳〵のいと情なくあさやかきかけはかまもひとつにて
なうひとまつや左もえんそくろきときせなりされは　男の衣ハウキツ子つく

細 尾の中に侍るにかくに紅の裾もひときは色なる下 花 桂
は色色なる スワウクロニアリ 青 花田なり ほ スワウヲフシカネ
ニテソメタル おなじ出家の人なるに用ゐくろきとトハシ 紅の
ナカラクロニタルナリ
うすきひ色のあやなるをくゝみきてすこしある色をきて
花 萱草色を柑子色と大略おなじすこしうすきをいひて
そもかうし
紅さくらのとりあとりそのうちきをきてはかまを
こそたてまつりぬべけれ
ほのかしやまくハうきかりなり
そあきまちにいか人のあまきとひろけなるこち

きすゑつきなり
細 髪のそぎすゑのひろかりしといふなり 孟 髪のす
そのていさきまさの似せたりその扇に有ニつきて
まさ 呼 河 檜扇とう平面そつむとあめのかき
あかりなり

源氏紫末抄 終

176
6
3